埼玉大学紀要　教育学部，58(1)：191-207（2009）

欧米市場における日本羽二重の動向と競合品
—19世紀末～20世紀初頭—

田村　均*

キーワード：欧米市場、日本羽二重、競合品、19世紀末～20世紀初頭、絹の大衆化、フランス、リヨン、薄地軽量化

1　はじめに

世界に先がけ、19世紀後半から20世紀前半にかけて「絹の大衆化」(1) が急速にすすんだヨーロッパおよびアメリカ諸国において、需要が増大し売れ行きが好調であった絹織物は、豪華なファソネ（紋織や模様物）よりも、ユニ（単色無地物）や反染物（後染めの単色無地物ないし捺染品）のようなシンプルな低価格品であった (2)。低価格化を梃子とした大衆需要の喚起が、いうまでもなく旧来のような奢侈的な高級品や高価な厚地製品よりも、薄地軽量の中ないし下級絹布の需要を不断に惹起させたからである。なかでも大衆需要の急拡大を牽引したのは、タフタ（薄琥珀）をはじめサテン（繻子）・絹モスリン・薄クレープ（薄地縮緬）のほか、「ポンジー」と呼称された白生地の中国産絹紬や日本羽二重を染色加工した低価格水準の薄絹であった(3)。

ヨーロッパへ日本羽二重の輸出が増加しはじめる1889（明治22）年6月、フランス・リヨンからの帝国領事館報告によれば、「本年婦人夏服用ノ流行品ハ、即チ本邦産羽二重、支那産「ポンゼー（英語pongee）ニ版行染（捺染加工——引用者）ノ方法ヲ以テ種々ノ模様ヲ染出シタルモノニシテ、又当地ニ於テハ無紋ニ染製シ版行染ノ分ト共ニ之レヲ米合衆国ノ国々ニ輸出スルヨシ」(4) という情勢であった。つづけて同報告は、「当地ニ於ケル我羽二重ノ需要高ハ前年ニ比スレハ、一層増加セシコトナルベシ」(5) と、世界一の絹業センターであったリヨンの19世期末における羽二重市況の趨勢を本国につたえている。

その後、20世紀はじめの1901（明治34）年の5～12月、農商務省の委嘱により欧米絹業調査のためフランスを再訪した染織技術者・近藤徳太郎 (6) は、「近来ハ阪地僻村ノ婦女子ニ至ルマデ皆之（絹織物——引用者）ヲ用ウルノ風ヲ為シ」(7) という状況を目の当たりにしている。明治初年代にリヨン織物学校への留学を経験していた近藤徳太郎にしても、20世紀になるや、フランス社会で「貴賤上下ノ区別ナク凡テ絹織物ヲ纏ヒ得ル」(8) ほどに絹着用の「平民化」(9) ＝大衆化が進展していた状況を、驚きをもって眺めたにちがいない。また、その前年の1900（同33）年3～4月、フランスのパリで開催された万国博覧会を福井県出品人総代として視察するため、パリとリヨンに滞在した福井県絹織物同業組合副組長の松井文太郎も、「従来ハ貴族的贅沢品ナリシモノモ今ヤ平民的必需品トナ

* 埼玉大学教育学部コラボレーション教育講座

リ、衣服ノ如キモ成ヘク軽快体ニ適スルモノヲ喜フニ至リタリ、本邦軽目羽二重カ市場ニ歓迎セラレ其売行ノ活発ナルモ、全ク此風潮ニ適シタレハナリ」[10] と、大衆化する欧米社会で受容される日本羽二重の市況と趨勢を報告している。

絹業視察を機に、ヨーロッパ社会ですすむ絹の大衆化の実態を目撃した近藤徳太郎と松井文太郎がともに重視したのは、つぎの点にあった。すなわち、母国よりもはるかに先んじていた未曾有の情勢のなかで、日本羽二重が中国絹などのアジア物産のみならず、欧米諸国で生産される下級絹布や薄地軽量の流行品とも競合しているという新たな事態であった。フランスをはじめイギリスやスイス、そしてアメリカでも日本羽二重に対抗するような下級絹布がつくられはじめていたからである。1900（明治33）年6～11月、農商務省および福井県絹織物同業組合からパリ万国博覧会の視察調査を嘱託され、松井文太郎と入れちがいにフランスに渡り欧米諸国をふたたび訪問した杉田定一が日本羽二重の競合品として列挙したのは、以下の6種類であった。①リヨン製ポンジー（「里昂羽二重」）、②リヨン製絹綿交織、③アメリカ製「フーラー」（薄絹）、④タフタ（フランス製・スイス製・米国製の薄琥珀――引用者）、⑤中国産ポンジー、⑥「リバティー　サテン」（イギリス製の絹綿繻子――引用者）[11]。

杉田定一は同業組合の前身・福井県絹織物組合から海外羽二重商況の調査を委嘱され、1896（明治29）年の7～11月にかけても、欧米諸国のおもな絹業都市（パターソン・マンチェスター・ジュネーブ・チューリヒ・リヨンなど）をめぐっていた。しかしその時は、現地でスイス製の安価な軽目絹（薄琥珀＝タフタ――引用者）の抬頭を懸念する声があがっているが、「目下欧米諸国に於ては我羽二重に競争し得る者なしと断言するも敢て過言に非ざるに似たる」[12] として、日本羽二重の強敵として「近来仏国へ輸入すること我羽二重の倍数にして羽二重に比して丈夫且こわみありとて評判よろしき」[13] 中国産ポンジーを指摘したにすぎなかった。杉田が提出した2回の視察報告から推察するに、19世紀末の欧米諸国において、とりわけフランスのリヨンにあっても日本羽二重と直接競合するような自国製の代替ポンジー（里昂羽二重）の生産はまだ着手されていなかったようである。

そうであったとすれば、杉田自身による4年後の再訪調査の結果は、まさに20世紀への転換期に、日本羽二重や中国産ポンジーと直接競合しうる代替品生産が欧米諸国で勃興した事実を示唆しよう。このことは、明治20年代後半から日本国内で生産拡大する外国向羽二重の輸出市況の変動が、国際市場において中国・インドをはじめとする他のアジア物産との競合にとどまらず、欧米各国で生産開始された下級絹布との新たな競合関係のなかで生じていたことを意味する。なお、近藤徳太郎の調査データによると、19世紀末においてフランスに輸入され白生地のまま取引される製品やリヨンで染色加工される「東洋産加工織物」の6割強を占めていたのは日本羽二重であり、残りの3割ほどが中国産絹紬とインド産の粗絹布（コラー）であった[14]。

ところで、1880年代後半から欧米輸出が本格化する日本羽二重をめぐって、近年の日本経済史研究[15] はいわば供給サイドの問題にいちだんと関心を向けつつある。そこでは、近代日本における輸出羽二重業の発展過程で生じた「粗製濫造」問題や品質規制をめぐる制度的対応などが考察され、新たな発見事実や知見が提示されている。しかしそのいっぽうで、日本国内で問題化する「粗製濫造」や品質規制をめぐる制度的対応が、そもそも羽二重の輸出先である欧米諸国のいかなる需給状況のもとで生じていたのか、あるいは日本羽二重が国際市場でどのような競合関係におかれていたのかいう需要サイドの問題は、まったく手つかずのままである。近代日本の輸出羽二重に関するもう一つの重要な研究課題として、羽二重の海外需要の発生・

変動をめぐる国際的な市場条件を分析し、輸出＝欧米市場における日本羽二重の地位や競合関係をより具体的に考察することが不可欠であることは論をまたない。

したがって本稿は、近代日本が遭遇した国際的な環境変化＝絹の大衆化をめぐる未曾有の需給変動と競合関係の特質をあきらかにするため、19世紀末から20世紀初頭にかけて欧米市場で進行した絹織物の低級・低価格化＝薄地軽量化のより具体的な実態把握と流行トレンドについての考察を試みる。当該期において、フランスをはじめとする欧米の主要絹業国で日本や中国などの東アジア産絹に対抗しうる代替品やポンジーの国産化がくわだてられ、国際市場における日本羽二重をとりまく競合関係が変容・激化し、新たな段階にはいりつつあったからである。

依拠する史料は、①実物資料として前稿[16]で用いた『欧米染織鑑』（筆者所蔵、1901年刊行）に収録された織物サンプルと、②文字資料として同時代に記録され、外務省が『通商彙纂』として編集した「帝国領事館報告」（以下、「領事報告」と略す）と農商務省が編纂・発行した「海外実業練習生報告書」・「嘱託調査員復命書」である。いずれも、海外情報の収集のため外務・農商務両省が企画・編纂・刊行したもので史料的価値が高い。とりわけ後者は、専門的な技術者養成のために海外に派遣した実業練習生や、すでに専門的かつ実業的な知見を有した技術者や製造業者を海外調査員に嘱託し、農商務省が独自に具体的な現地情報の収集につとめたものである。

2　日本羽二重の用途と品質変化

伝統的に、日本国内において絹織物は量目（製品重量）を商取引の標準とする価格設定がなされていた。明治期になっても、慣習的に良質な生糸遣いの正絹織物ほど量目取引がおこなわれていた。輸出向羽二重の場合には、精錬漂白後の幅１寸（約１インチ）・長さ６丈（約25ヤード）の単位重量を意味する「目付」が取引相場の標準となった[17]。目付は時代によって変化したが、19世紀末（明治30年代初頭）において、おおよそ「重目」（８～11匁付）・「中目」（５～８匁付）・「軽目」（3.5～５匁付）の３種類に区分されていた。

輸出羽二重は、14～16デニールの器械製糸を経２～３本ないし１本、そして緯糸は経糸よりも太めの生糸（器械糸または座繰糸）を１本ないし４本くらい織りこむのを普通とし、４匁付前後から14匁付くらいまでの目付幅があった。これにたいし、内地向羽二重は30デニール前後の手挽糸ないし座繰糸をたいてい経２本・緯４本程度もちいて製織され、１疋（２反相当）の量目が160～300匁くらい、重目物ではそれ以上におよぶものもあった。量目160～300匁は、目付に換算すると20～40匁付前後となる。

一般に、内地向羽二重は重目の小幅物であった。いっぽう、明治期に生産拡大する輸出向けの羽二重は広幅で製織され、その中心は10匁付前後の重目物から、しだいにそれ以下の中目物や軽目物にシフトした。国内用の重目羽二重の主産地は群馬県桐生であったが、輸出産地として急成長するのは、明治10年代に桐生から技術導入をはかった福井県であった[18]。そして、中目羽二重の輸出産地として成長するのが石川・富山・山形（鶴岡）の３県、軽目羽二重の筆頭的産地となるのが福島県川俣地方であった[19]。

ほんらい、羽二重はその名称から推察されるように、経２本と緯２本の細めの生糸をていねいに斜子（ななこ）組織に織りなす絹織物であった。それは、綜絖（綾目）に糊づけした生糸を２本ずつ通し、その「二重」にした２本の生糸を筬目一羽に「４つ入れ」すなわち２本ずつ計４本通すもので、織目が細やかにつんだ後練の絹織物であった。とりわけ内地用の（重目）羽二重は良質で、伝統的に絹の高級品に属した。

しかし、明治期になって海外需要の発生におうじて羽二重輸出が増加しはじめると、ただち

に在来品よりもはるかに軽量で安価な輸出専用品の生産に転換しなければならなかった。それは、輸出先の欧米市場からの要請であったからである。そこで注目されたのが、横浜からの積戻糸（器械製生糸）である。細くてより均質な器械糸は手挽きや座繰りによる在来糸よりも高価であったが、それをもちいて手機（広幅用の高機）ながらもバッタン（飛杼）装備により量産的に製織すれば、在来品よりもはるかに軽量安価な輸出専用の羽二重生産が可能となった。けれども、在来の生糸よりも良質高価な器械糸を経・緯糸ともに織りこむ輸出羽二重は、その当初から重大なパラドックスをかかえこむことになった。その理由は、より高品質の高価な細糸を使って薄地軽量の低価格品を生産しなければならないという矛盾をはじめから内包したからである。

輸出市場からの要求におうじて、それまで「４つ入れ」・「２本経」の本羽二重（諸羽二重）の体裁であった重目羽二重は薄地軽量化をよぎなくされ、なかでも中目や軽目物にいたっては「２つ入れ」・「１本経」の片羽二重へと変質していった。絹織物にあって、薄地軽量化は製品価格の低下を意味すると同時に品質の劣化を内包する。この点において、明治期に勃興した輸出羽二重業は、在来水準から原料糸の品質をいっきに飛躍させたにもかかわらず、輸出専用であっただけに海外市場からの薄地軽量化＝低価格化の執拗な要求を受ける宿命を帯びたのである。絹織物にあって、低価格化＝薄地軽量化の実現は品質劣化への誘惑との格闘であり、いいかえれば「粗製濫造」の危険性とつねに隣りあわせであったといっても過言ではない。

そもそも、規格が統一された広幅製品として標準化と品質の斉一性が極度に要請された輸出向けの軽量羽二重は、国内用小幅の重目羽二重とは品質的に異なるものであったといってよいだろう。いわゆる１本経の中目ないし軽目の片羽二重にいたっては、２本経の本羽二重とはまったく別の製品に転化したとみるのが妥当である。近世以来の内国羽二重の品質標準からすれば、生糸の使用量を大幅に節約し、しかも斜子組織ではない１本経（単純平織組織）の薄地軽量の片羽二重は、本来の羽二重とはいえるようなものではなかったといってよい。

かつて存在しなかった、そのような新製品を生みだすまでに日本羽二重の軽量薄地化を要求したのが欧米市場であり、なかでもそのうごきに拍車をかけたのがフランス市場であった。当時、「仏国ガ欧州流行ノ中心ト呼バルヽハ已ニ世人ノ熟知スル所」[20] となり、「同国婦人ハ殊ニ美服ヲ着用シ、我邦福井産ノ羽二重ハ夏季ニ於テ殆ンド彼等ノ常服トナリ、拾中八九ハ皆之ヲ着用シ、襟飾ノ如キモ多ク之レヲ使用」[21] し、福井産羽二重がフランスをはじめとする欧米女性の夏服に広く浸透するまでになっていた。

欧米諸国のモードをリードするフランスにおいて、夏季のファッションとして薄地絹物の着用がひろがり、「最モ上流ノ家族ハ薄色琥珀或ハ繻子地ニ刺繍模様ヲ為セシモノ、若クハ『レース』ヲ織込ミ或ハ之ヲ前記無地織物ノ上ニ掩シモノ最モ流行シ」[22]、「中流ニ至リテハ羽二重ノ形付最モ多ク、其他薄琥珀無地物是ニ次ケリ」[23] という状況であった。タフタ　ファソネやダマ（繻子紋織）などの模様・刺繍柄ないしレースの装飾をほどこした上級品がおもに上層市民向けに供給され、中・下層用としてタフタ　ユニ（薄琥珀無地物）などの中級絹布に代替して福井羽二重の染付品が受容されていたことがうかがえる。また、「『ネキタイ』（ネクタイ――引用者）用トシテ男女共ニ羽二重ノ染形大ニ流行」[24] し、衣類のみならずその装飾用の加工素材としても羽二重が評価されはじめていた。

もともと絹製品の厳格な格付けと品質管理がなされていた欧米きっての絹業国・フランスでは、19世紀末にかけて９～11デニールという極細で最高品質の生糸１本を強撚して製織した絹モスリンやクレープ　ド　シーヌ（極細縮緬）などの軽量薄地の新製品がつぎつぎに開発され、

流行市場に投入された[25]。それらは、おもに女性のドレス・ファッション（衣服や帽子など）の襟地や襞地など、もっぱら装飾用としての需要が急増したものである。当時のフランス市場における日本羽二重の大半は、白生地のまま半製品としてとりあつかわれ、おもにリヨンで模様を多色に「形付」（捺染加工）されるか、あるいは「染揚」（単色無地の染色）がほどこされた[26]。近藤徳太郎が的確に指摘したように、「羽二重ノ如キハ生地用トシテ価格ノ低廉ナル為ニ始メテ需用アル半製品」[27]であったのである

欧米市場における日本羽二重の商取引は日本での目付（単位重量）によるものとはちがって、単位長にもとづく売買がおこなわれた。その理由は、もっぱら貴族用として超絶的な品格を誇っていた旧時代とくらべると絹織物の品質とバリエーションが劣化＝縮小し、極端なまでに標準化したためであると考えられる。すなわち、「日本ニテハ目方ヲ以テ売買シ、当地（アメリカ――引用者）ニテハ寸尺ニ依リテ取引スル」[28]ものであり、次章で考察するように何種類かの織巾単位で１ヤード（アメリカ・イギリス市場）ないし１メートル（フランス・スイス・ドイツなどのヨーロッパ市場）あたりの標準相場が設定された。とりわけ、シルクの日用品化がすすんでいたアメリカでは、店頭にて布巻タイプの各種絹織物が１ヤード単位の小売価格で切売りされていた[29]。

表１は、羽二重需要のなかでも捺染用が増加していた1900（明治33）年前後のフランス市場における日本羽二重の用途と品質の概要である。当時、リヨンからの領事報告は、「昨年ノ流行カ一般ニ捺染品ヲ需要シタルコト既ニ世人ノ知ル所ノ如シ、而シテ捺染ニハ羽二重コソ実ニ適当ノ絹布ニシテ、昨年（1899年――引用者）ノ輸入高カ未曾有ノ多額ニ達シタル」[30]ことをつたえている。それによると、捺染用はおもに重目羽二重（12～11匁付）であり、加工品は女性衣服をはじめ、男女襟飾や家具・諸道具の装飾品などにもちいられた。いっぽう、中目羽二重（７匁付）は無地に染色されたのち、重目物とおなじ用途ないし裏地や下着用シャツ・寝衣などに、軽目羽二重（４～3.5匁付）は、婦人用の上衣・襟飾・帽子飾・リボン用として流行する絹モスリンの代用品として染色加工された。

注目したいのは、重目および中目羽二重の目付がいずれも数年で変化し、２～３割も軽量化したことである。前者が10～8.5/８匁付に、そして後者は6.5/６～５匁付にまで低下している。このうごきは、19世紀末から20世紀初頭にかけて、フランスで需要される羽二重などの染色加工用の絹物半製品の軽量化に拍車がかかっていたことを示唆する。この点について、領事報告は「当時絹織物類カ羽二重タルト否トヲ問ハス、益々軽目廉価ノモノヲ多量ニ製産シ可也廉価ニ販売スル」[31]と、絹織物が全体的に低価格化し軽量安価な製品が需要を獲得していた市況の様子を指摘している。

と同時に、最新の薄地軽量品として流行しは

表１　フランス市場における日本羽二重の用途と品質（1900年）

製品種類	用　途	品質（目付の変化）
捺染物	女性衣服（上着・袴）、男女襟飾、家具・諸道具の装飾品など	12～11匁付（1897年頃） →　10～8.5/８匁付（1900年）
無地物	裏地、下着用シャツ、股引、寝衣、男女の襟飾、衣類・諸般装飾品	７匁付（19世紀末） →　6.5/６～５匁付（1900年）
絹モスリン代用品	（女性上衣・襟飾、帽子飾、リボン）	流行品3.5～４匁付（川俣羽二重）

資料）明治33年７月10日付在里昂帝国領事館報告「仏国ニ於ケル本邦羽二重」『通商彙纂』第170号、1900年７月、85～89頁。

じめた絹モスリンの低級代用品として、軽目羽二重の需要がにわかに拡大していた。この動向が、極東の日本において一本経の新製品を開発した福島県川俣地方が片羽二重の生産を急成長させた要因であった。明治40年代初頭（1907年頃）になると、薄地軽量化による目付変化がいっそうすすみ、中目羽二重が6.5～5匁付に、そして軽目物が4.5～3匁付にまで低下した[32]。そして、イブニングドレス用の需要増加にくわえ、女性下着用のみならず上着用の羽二重需要がそれまでの重目物から中目物へとシフトしたため、中目羽二重の需要も拡大した。こうしたなかで、それまで重目の比率が大きかった福井羽二重が7.5～6匁付の中目領域に参入するいっぽう、中目の石川羽二重も5.5～5匁付へ、そして軽目の川俣羽二重が4.5～3匁付へと、いちだんと薄地軽量化をすすめたのである。

3 「視察報告」・「領事報告」にみる日本羽二重の市況と競合品

1896（明治29）年の7～11月、福井県絹織物組合副組長の村野文次郎は同組合から海外羽二重商況の調査を委嘱され、冒頭で紹介した杉田定一とともに欧米諸国の絹業都市を巡見した。帰国後、村野はアメリカ市場とヨーロッパ市場のちがいをつぎのように説明している。すなわち、「日本羽二重ハ欧米各国都鄙一般ニ流行スレトモ、米国ニ於テハ支那絹僅少ニシテ我カ羽二重ノ占有ト云テ可ナランカ」[33]なのにたいし、「欧州各国ニ於テハ支那絹大半ヲ占メ我カ羽二重ト略ホ価格ヲ均フシ恐ルヘキ大敵ナリ」[34]と指摘した。日本羽二重が占有していたアメリカ市場とちがって、ヨーロッパ市場では支那絹（中国産ポンジー）が量的優位に立ち、しかも価格面で日本羽二重と拮抗していたのである。そのため村野は、「羽二重ノ製造タルヤ価格ヲ低廉ニシ、而シテ濫造スルコトナクンハ時トシテ流行ニ伴レ供給ノ度合ヲ失スルアルモ、決シテ需用ノ途ヲ塞クノ患ナシ」[35]と述べ、流行に左右されながらも海外需要の掌握のためには、品質を維持し羽二重の価格を低廉化させることが肝要であると分析した。

さらに村野文次郎は、リヨン商業会議所の調査データに依拠し、1895（明治28）年時点でのフランス市場での中国産ポンジーの占有率は日本羽二重の1.3倍程度であったとした[36]。この数量は、ヨーロッパ市場全体では大半を占める中国産ポンジーのフランス市場での量的優位がもはや絶対的なものではなかったことを意味する。村野の同伴者・杉田定一がそれまでフランスの中国産ポンジーの輸入量は日本羽二重の2倍程度であったとしているので、このことは19世紀末にかけてフランス市場にあっては絹紬製品である中国産ポンジーの量的優位がくずれ、正絹すなわち生糸遣いの日本羽二重の評価が高まっていた状態を示唆しよう。

なお、日本羽二重の用途について、村野文次郎はアメリカやフランスのような「暖地」では女性上衣に、イギリスやドイツなどの「稍〻寒キ地方」では下衣にもちいられるが、いずれの国々にあっても「薄地ヨリ寧ロ厚地ヲ嗜好ス」[37]と報告している。なかでも、フランスでも「薄地ヨリ厚地ヲ嗜好ス、然レドモ薄地ハ必スシモ需要ナキニハ非ス」[38]と指摘している。この時点では、欧米市場において衣服用として「厚地」すなわち中国産ポンジーや重目羽二重の需要が、中目ないし軽目羽二重よりも優勢であったことがうかがえる。

しかし、その後のフランス市場における日本羽二重の量的優位は下級絹布にたいする嗜好の変化が生じたことを物語るものとなる。杉田定一はこの点について、用途により異なるものの厚地は一般にイギリス向きであるが、フランスでは「厚きも薄きも適当す、但し薄き方宜し其は値段が安き為め」[39]、「当分専ら売るゝものは薄地なり」[40]と、売れ筋が薄地物のほうにあると分析している。下級絹布のなかでも軽量でより安価な商品の市場投入が、フランスにおける絹の大衆需要をよりいっそう喚起していた

ものとみられる。いいかえれば、絹の大衆化がいちだんとすすんだ19世紀末のフランスで、下級絹布にたいする関心が衣服用から装飾用へと高まって、重目物からより軽量安価な中目・軽目物への急速なシフトが惹起されていたといえよう。そうした趨勢は、先行的に受容されていたやや粗雑な中国製品よりも品質良好な日本羽二重への評価が高まり、日本製品への需要シフトとなってあらわれたことを示唆する。

表2は、村野文次郎が報告した欧米市場における日本羽二重の市況データ（1896年）を整理したものである。書き上げられたのは、フランス・イギリス・アメリカ3カ国での日本産の羽二重および甲斐絹（かいき）の小売価格であり、ヨーロッパ市場で日本製品と対抗していたとみられる中国産ポンジーの調査データはない。村野は日本羽二重の競合関係をめぐって、杉田定一とおなじく「競争ノ敵ハ支那絹ニアリテ外ニ敵ナシ」[41]との状況認識を示した。したがって、村野文次郎が帰朝報告のなかでライバルのデータを書き上げなかったのは、彼の調査関心が何よりもまず日本製品とくに福井羽二重の需要動向におかれていたからであったと推測される。しかも村野は、日本羽二重のほうが中国産ポンジーよりも品質優位にあるので両者は直接的な価格競争の関係にはなかったと認識し、たとえ両者の価格が同一水準になっても、消費者は品質良好な日本製品のほうを選好するとみていたと思われる。

ニューヨークからの領事報告によると、当時、すでにアメリカでもより安価な軽量羽二重の需要が拡大し、「近来軽目物多ク甚シキハ六匁付以下ノモノアリ」[42]という状況になっていた。在サンフランシスコの領事報告は、「日本製軽量羽二重ハ美麗ナル割合ニ其価格甚廉ニシテ、一『ヤード』三十仙（30セント――引用者）乃至五十仙位ナレバ貧富ノ別ナク一般人民ノ容易ニ需要シ得ベキコト之ナリ」[43]と報告している。日本から輸出された軽目羽二重（6～7匁付）の小売相場が1ヤード30～50セントの水準であれば、貧富の別なく当該商品が購入される状況であったというのである。しかもこの市況

表2　欧米市場における日本羽二重と甲斐絹の小売相場（1896年）

国	製品名	【属性】	巾	小売値段	日本円
フランス	日本羽二重	白生地	1尺3寸	1フラン20サンチーム／1メートル	45銭6厘
フランス	日本羽二重	白生地	1尺5寸	1フラン50サンチーム／1メートル	57銭
フランス	日本羽二重	白生地	1尺3寸	48フラン／50メートル	19円【38銭／1メートル】
フランス	日本羽二重	白生地	1尺5寸	50フラン／50メートル	23円【46銭／1メートル】
フランス	紅梅赤各種染羽二重	染生地	1尺3寸	1フラン50サンチーム／1メートル	57銭
フランス	紅梅赤各種染羽二重	染生地	1尺5寸	1フラン75サンチーム／1メートル	66銭5厘
イギリス	日本羽二重	白生地	23インチ【1尺5寸3分】	38シリング6ペンス／50ヤード	20円【40銭／1ヤード】
イギリス	日本羽二重	白生地	32インチ【2尺1寸3分】	61シリング／50ヤード	28円68銭【57銭4厘／1ヤード】
イギリス	日本羽二重	白生地	23インチ【1尺5寸3分】	1シリング4.5ペンス／1ヤード	64銭5厘
イギリス	日本羽二重	白生地	36インチ【2尺4寸】	1シリング6ペンス／1ヤード	70銭
アメリカ	日本羽二重	白生地	1尺8寸	30セント／1ヤード	56銭4厘
アメリカ	日本羽二重	白生地	小幅物	20セント／1ヤード	37銭6厘
アメリカ	縞甲斐絹	模様絹	小幅物	25セント／1ヤード	46銭
アメリカ	縞羽二重	模様絹	小幅物	25セント／1ヤード	46銭
アメリカ	紋物羽二重	模様絹	小幅物	30～35セント／1ヤード	56銭4厘～65銭8厘

注）【属性】欄および【　】内のデータは、筆者の補注。
史料）村野文次郎「欧米絹織物状況視察報告」（『農商務省商工局臨時報告（復刻版）』第1巻、ゆまに書房、2002年、pp.16～18）。

なら、「欧米諸国ノ製品ハ勿論支那製羽二重（中国産ポンジーのこと――引用者）モ到底競争スル能ハザル処ナリ」(44) と報告し、日用品化した下級絹布の物価水準に日本羽二重が参入すれば、品質劣位の中国産ポンジーはもはや競争力を発揮しえないとみなしている。村野文次郎が報告したアメリカでの日本製品の価格データをみると、いずれの商品も１ヤード30セント前後の小売相場を示し大衆需要に適合していたことが確認できる。

そして日本羽二重は、ヨーロッパ市場においても白生地で小売されていた。ヨーロッパにあっては白生地の取引量が多かったのはイギリスであるが、1896（明治29）年の時点にあっては、フランスでも白生地の羽二重が衣類用などの最終製品として小売されていた。相場データを確認しておくと、イギリスでの白生地23インチ物の相場（40銭と64銭５厘）に24銭５厘の差がみられるが、おそらく値段の高いものが重目羽二重で安いほうは軽目物であったのではないかとみられる。フランスでも同様である。目付が判明しないので品目ごとの考察ができないが、およそ染羽二重の小売相場は白羽二重の10～20銭高であったといえよう。

これにたいし、４年後に欧米諸国を再訪した杉田定一がリストアップした日本羽二重とポンジー製品などの市況データ（1900年）の一覧が表３である。日本製品の競合品として小売相場が具体的に書き上げられたのは、中国産ポンジーをはじめとして、リヨン製のポンジー・琥珀・絹モスリン・絹綿交織・絹紡績織であった。欧米市場で流通する下級絹布は、もはや中国産ポンジーや日本羽二重だけではなかった市況を確認できる。各種のリヨン製品が新規に登場し、日本羽二重をとりまく海外市場条件が大きく変化していた状況がうかがえる。ただし、この時点ではアメリカ市場で日本製品と競合的となるアメリカ製フーラー（薄絹）はふくまれていない。なお、この杉田の調査データでも目付はわからない。

まずイギリスでの相場をみておくと、13点の白羽二重のうち１ヤード（約１メートル）の小売単価が１円20銭以上のものが９点、70～80銭が３点、そして50銭台が１点である。しかし、５種類の織巾（23・26・27・34・36インチ）が確認できるので、それらの小売相場をフランス相場と比較するため便宜上23インチで換算しなおすと、13点のうち４点が１円以上ないし１円前後の水準となる。残りの９点は１円以下となるが、価格帯を80銭前後～１円10銭の範囲にひろげると半数以上の７点がおさまる。おそらく、この価格帯に分布するのが重目羽二重であったと推測される。そして、それよりも下位の相場のものが中目以下もしくは品質の劣る商品ではなかったかとみられる。

イギリスのロンドン市場で取引された製品の多くが福井産などの重目ないし中目の白羽二重であり、しかもその少なくないものがフランスやスイス市場に転売された。そしてそれらは、リヨンをはじめスイスのチューリヒなどで染色加工されたのち、ふたたび欧米市場へ再輸出されていった。とりわけ、日本羽二重の「多クハ仏国里昂ニ於テ捺染整理シ他国ヘ再輸出スルモノニシテ、里昂ハ中間ニ於テ捺染整理ノ利益ヲ襲断スルモノナリ」(45) という状況であった。相場リストのなかに、リヨンで染色加工された日本羽二重や中国産ポンジーの小売品をすくなくとも３点ほど確認できる。

なかでも注意をひくのが、リヨンで染付・捺染された日本羽二重や中国産ポンジーの小売品に伍して、１円以下の中位ないし下位の価格帯に集中的に分布するリヨン製品群である。フランスの相場データ13点のうち、織巾が判明するのは日本羽二重の捺染加工品（22.5インチ）と絹モスリン（14インチ）の２点だけである。それ以外の品目の織巾については、琥珀（タフタ）を20インチ前後、そして日本羽二重・中国産ポンジーおよびリヨン製ポンジーを22～23インチ程度とみなしておく。

この前提で、14インチ巾の絹モスリンの小売

表3　欧米市場における日本羽二重とポンジー製品などの小売相場（1900年）

国	製品名	属性	【経糸】	【緯糸】	織巾	【日本尺巾】	小売価格	【日本円】	【23インチ換算】
アメリカ	日本羽二重黒染	無　地	生糸	生糸	（不明）	——	1ドル／1ヤード	2円	（2円）
フランス	支那ポンジー巴里リーバーテー黄及赤サラサ染	捺染地	生糸/紬糸	紬糸	（不明）	——	5フラン／1メートル	2円	（2円）
フランス	リヨン製琥珀紅青碁盤縞	模様絹	絹撚糸	絹撚糸	（不明）	——	4フラン／1メートル	1円60銭	（1円60銭）
イギリス	日本無地白羽二重	白生地	生糸	生糸	34インチ	2尺2寸7分	3シリング9ペンス／1ヤード	1円86銭	1円25銭8厘
フランス	リヨン製絹モスリン	白生地	生糸	生糸	14インチ	9寸3分	1フラン95サンチーム／1メートル	78銭	1円28銭1厘
フランス	リヨン製ポンジー白雲形流行模様	捺染地	生糸/紡績絹糸	紡績絹糸	（不明）	——	3フラン／1メートル	1円20銭	（1円20銭）
アメリカ	日本羽二重紫更紗染	捺染地	生糸	生糸	（不明）	——	59セント／1ヤード	1円18銭	（1円18銭）
イギリス	日本無地白羽二重	白生地	生糸	生糸	34インチ	2尺2寸7分	3シリング2ペンス／1ヤード	1円58銭	1円6銭9厘
イギリス	日本無地白羽二重	白生地	生糸	生糸	27インチ	1尺8寸	2シリング6ペンス／1ヤード	1円24銭	1円5銭6厘
イギリス	日本無地白羽二重	白生地	生糸	生糸	36インチ	2尺4寸	3シリング3ペンス／1ヤード	1円62銭	1円3銭5厘
フランス	支那ポンジー里昂仕上白地赤小紋	捺染地	生糸/紬糸	紬糸	（不明）	——	2フラン50サンチーム／1メートル	1円	（1円）
フランス	リヨン製琥珀紫地青竪縞	模様絹	絹撚糸	絹撚糸	（不明）	——	2フラン50サンチーム／1メートル	1円	（1円）
イギリス	日本無地白羽二重	白生地	生糸	生糸	36インチ	2尺4寸	3シリング／1ヤード	1円50銭	95銭8厘
イギリス	日本無地白羽二重	白生地	生糸	生糸	36インチ	2尺4寸	2シリング9ペンス／1ヤード	1円36銭	86銭9厘
イギリス	日本無地白羽二重	白生地	生糸	生糸	36インチ	2尺4寸	2シリング6ペンス／1ヤード	1円24銭	79銭2厘
イギリス	日本無地白羽二重	白生地	生糸	生糸	36インチ	2尺4寸	2シリング6ペンス／1ヤード	1円24銭	79銭2厘
アメリカ	日本羽二重萌黄染	無　地	生糸	生糸	（不明）	——	39セント／1ヤード	78銭	（78銭）
フランス	日本羽二重更紗染	捺染地	生糸	生糸	22.5インチ	1尺5寸	1フラン95サンチーム／1メートル	78銭	78銭
フランス	リヨン製ポンジー白地青模様	捺染地	生糸/紡績絹糸	紡績絹糸	（不明）	——	1フラン95サンチーム／1メートル	78銭	（78銭）
フランス	リヨン製ポンジー紫小紋染	捺染地	生糸/紡績絹糸	紡績絹糸	（不明）	——	1フラン95サンチーム／1メートル	78銭	（78銭）
フランス	リヨン製ポンジー青角小紋	捺染地	生糸/紡績絹糸	紡績絹糸	（不明）	——	1フラン95サンチーム／1メートル	78銭	（78銭）
フランス	リヨン製琥珀黄地小紋	捺染地	生糸	生糸	（不明）	——	1フラン95サンチーム／1メートル	78銭	（78銭）
イギリス	日本無地白羽二重	白生地	生糸	生糸	36インチ	2尺4寸	2シリング5ペンス／1ヤード	1円20銭	76銭7厘
フランス	リヨン製ポンジー絹綿交織黄縞	捺染地	生糸	綿糸	（不明）	——	1フラン90サンチーム／1メートル	76銭	（76銭）
イギリス	日本無地白羽二重	白生地	生糸	生糸	23インチ	1尺5寸3分	1シリング5ペンス／1ヤード	70銭	70銭
イギリス	日本無地白羽二重	白生地	生糸	生糸	27インチ	1尺8寸	1シリング7ペンス／1ヤード	78銭	66銭4厘
フランス	リヨン製パアフハン赤絞縞絹紡績	捺染地	紡績絹糸	紡績絹糸	（不明）	——	1フラン45サンチーム／1メートル	58銭	（58銭）
イギリス	日本無地白羽二重	白生地	生糸	生糸	36インチ	2尺4寸	1シリング6ペンス／1ヤード	74銭	47銭3厘
イギリス	日本無地白羽二重	白生地	生糸	生糸	27インチ	1尺8寸	1シリング11ペンス／1ヤード	55銭	46銭9厘

注）【　】欄の記載事項・換算データは筆者による補注で、【23インチ換算】欄の括弧は推定値。
史料）杉田定一「海外絹織物調査報告」（『農商務省商工局臨時報告　明治三十四年』ゆまに書房、復刻版（第5巻）、2002年、pp.6～8）。

相場を23インチ巾の商品として換算すると、その単価はより上位の価格帯にジャンプする。すなわち、それは1円28銭1厘の小売相場となり、全体で第4位、フランス製品のなかで第3位の高値を示す。この絹モスリンは無地物であったと想定されるが、それと日本羽二重やリヨン製ポンジーなどの染色加工品との価格差は日本円換算で50銭前後もの開きがあった。まさに、この商品が流行市場に投入されたばかりの新製品であったことがうかがえよう。小売単価が1円以上の価格帯には、(薄)琥珀(タフタ)をはじめ、黒もしくは流行模様に染色加工され付加価値を高めた商品がより高位にランクされる。琥珀は値段の高いものが先染めの手織製品で、安いほうは後染め(反染品)の力織機製品であったとみられる。

総じて、より下位の価格帯で対抗していたとみられるのが日本羽二重とリヨン製ポンジーである。杉田定一による相場リストのなかで、4年前に杉田とおなじく村野文次郎が唯一最大のライバルとみなした中国産ポンジーは、デザイン性の高い流行模様に染色された染絹製品として1円以上のより上位の価格帯にランクインしていた。この点について、ヨーロッパ市場に日本羽二重よりも先んじて受容されていた中国産ポンジーの先行優位が、フランスのファッション業界で機能していたのではないかと考えられよう。あるいは、その製品慣性が捺染・整理工程において存続していたのかもしれない。いずれにしても、リストをみるかぎり低価格帯で日本羽二重の染色加工品と対抗していたのは、ほかならぬリヨン製ポンジーなどのフランス国産品であったとみることができよう。

リヨン製品には、生糸を経糸にもちいるが緯糸にはより安価な紡績絹糸を使用したポンジー(「里昂羽二重」)をはじめ、生糸に綿糸を交織した絹綿交織物や経・緯糸とも紡績絹糸を使用する絹紡績織などがあった。それらは、経・緯糸ともに生糸遣いの正絹製品であった日本羽二重とは異なり、原料糸を差別化して生産費を低減させる交織タイプの低価格商品である。杉田定一の調査は、こうしたリヨン製ポンジー類と日本羽二重を染色加工した小売品6点がほぼ同等の相場水準(76〜78銭)につらなる市況の存在を明示しているが、品質において生糸遣いの日本製品のほうが比較優位にあったことになる。リヨン製ポンジーの品質は、農商務省から委嘱されて1899(明治32)年にイタリア・フランス両国の絹業視察をおこなった京都西陣の織物業者・今西平兵衛によれば、「稍強硬ニシテ本邦産ノ如ク柔軟ナル能ハザルモノノ如シ」(46)であった。

当時、リヨンからの領事報告も日本羽二重の競合品としてリヨン製ポンジーを恐れるに足らないものとしていた。すなわち、「『里昂羽二重』(生糸ヲ経トシ紡績絹糸ヲ緯トス)ハ我羽二重ノ競争品ナリト称セラルヽコトアレドモ、目下ノ有様ニテハ恐ルヽニ足ラサルモノヽ如シ」(47)とみなしたのである。その理由として、①品質の点において染色・整理加工後の「前者(「里昂羽二重」——引用者)」ハ到底後者(「日本羽二重」——引用者)ノ美良ナルニ及フコト能ハサル」(48)ことにくわえ、②「昨年ノ如キ我羽二重ノ暴騰セシ時ニ於テスラ尚ホ『里昂羽二重』ハ其価格ノ点ニ於テ日本羽二重ト競争スルコト能ハサリシナリ」(49)としている。

在リヨンの領事館は日本羽二重の類似品としてリヨン製ポンジーの登場を意識しながらも、「目下ノ有様」として後者の品質劣位と価格弾力性の乏しいことを大きな弱点として指摘したのである。そのうえで、領事報告はリヨン製ポンジーが重目物の日本羽二重と競合することはあっても、「我羽二重ノ軽目物ニ競争スルガ如キコトハ到底不能ナル可シ」(50)との所見を示している。ケバが立ちやすい紡績絹糸を使用するリヨン製ポンジーは布帛面が羽二重ほど滑らかではなく、しかも目付の点でも10匁以上の重目の製品にならざるをえなかった。そのため、品質の面でリヨン製品は中目ないし軽目物にシフトしていた日本羽二重の直接的な競争相手に

はなりえないという状況認識が、領事館サイドにあったといえよう。

とはいえ、松井文太郎はリヨン製ポンジーの動向について、「本邦品ノ漸ク暴騰シ殊ニ綾地類ノ著シク騰貴スルヤ、里昂機業家ハ機敏ニモ直チニ廉価ナル支那糸ヲ縦トシ、絹綿交織品ノ類似品ヲ製出シ以テ本邦品ヲ圧倒セント企テタリ」(51) との、興味ぶかい市況報告をおこなっている。日本羽二重の評価が高まると、リヨン織物業界の対抗的なうごきが顕在化した。日本羽二重に対抗し、より安価な中国生糸を使用する低価格品が市場投入されたのである(52)。さらにリヨンでは、下級絹布に熱処理をほどこし機械圧力をかけ模様織物のような浮出模様と光沢を同時に顕出させる新技術＝「ゴーフラージュ　gaufrage」(53) が開発され、その加工素材として選択されたのが、むしろ品質劣位で価格低廉なリヨン製ポンジーであった(54)。

こうした状況下、日本羽二重が中国産やリヨン製のポンジーにたいして品質優位にあったとはいえ、いくつかの問題が伏在していた。すでに1889（明治22）年６月のリヨンからの領事報告は、「我羽二重ハ支那産『ポンゼー』ニ比スレハ品位優等ナルコトハ此地当業者ノ普ク認ムル所ナレドモ、亦決テ欠点ナシトセズ」(55) と、いわゆる粗製濫造への懸念をはやくから表明していた。当時の日本羽二重のなかに、織巾の不同や織斑・織歪があるため、捺染工程のみならず整理・仕上工程での不具合（染斑など）を発生させる粗製品が存在していたからである。

その11年後、欧米諸国の視察におもむいた松井文太郎は、「一本縦羽二重ハ生地の間コソ外見モ宜シケレトモ染上後ニ於テハ欠点暴露シ、且品質至テ薄弱ナレハ需要者ノ為ニ此上モナキ不経済品トシテ外人ノ評判一般ニ悪シキ」(56) と述べ、羽二重の織方のみならず精煉方法にも問題点があることを指摘している。松井が副組長をつとめる福井県絹織物同業組合は、彼がフランスへ渡航する以前に組合規約により片羽二重の生産を厳禁していた。最終消費の実態を現地でじかに見聞した業界関係者たちは、生産状況によっては日本羽二重の地位がけっして安定的なものではないことを強く実感したにちがいない。

4　『欧米染織鑑』にみる日本羽二重の市況と競合品

それでは、軽目物へシフトしていた欧米市場における日本羽二重の競合関係の実態はいかなるものであったのか。そして、実際の競合品はどのような属性の絹織物であったのか。そこで、1900（明治33）年中に欧米各地で収集され、外国製織物の標本カタログとして翌年の８月に東京で編集・発行された『欧米染織鑑』のサンプル・データを分析して、その実態にせまりたい。

本稿では、収録サンプルすべての織幅を便宜的に23インチ（約58センチ＝鯨尺１尺５寸３分）に換算し、この統一基準にもとづき卸売および小売価格の「23インチ換算」相場を算出した。なおかつ、さまざまな織巾で１メートルないし１ヤード単位で示されたサンプルの量目を、「目付換算」すなわち日本羽二重の取引標準である１寸幅・長さ25ヤードあたりの単位重量に変換しなおした。『欧米染織鑑』の多様なサンプル・データをいったん織幅23インチ基準にデータ変換し、さらにこれを目付換算値と相関させることで、各国間の製品相場のみならず日本羽二重を基準にした単位重量や日本円換算による製品単価の比較考察が可能となるからである。なお、１メートル＝1.09361ヤードとした。

表４は、収録サンプル112点のうち、表１に示した日本羽二重の目付範囲（12～３匁付）に相当ないし近接する目付換算値15匁以下の34点に、備考サンプルの２点をくわえた合計36点を一覧にしたものである。概して、生糸遣いや紡績絹糸・綿糸・麻糸などを交織して生産費を削減した製品群の卸売値段が低いのをみてとることができよう。これらのうち、日本羽二重を捺染加工したリヨン製品「ポンジー　ジャポネー

表4　『欧米染織鑑』における目付換算値15匁以下の織物サンプル（1900年）

番号	製品名	品目／素材生地	経糸種類	緯糸種類	生産地	幅	（鯨尺）	重量	【目付換算】	【卸売値段】	【小売値段】
1	モスリン ド スワ	絹モスリン	絹撚糸	絹撚糸	リヨン	1m24cm	3尺2寸7分	49g/1m	1匁	47銭	66銭
2	モスリン ド スワ	絹モスリン	絹撚糸	絹撚糸	リヨン	1m19cm	3尺1寸4分	6g/1m	1匁3分	49銭	68銭
3	モスリン ド スワ	絹モスリン	絹撚糸	絹撚糸	リヨン	1m19cm	3尺1寸4分	6g/1m	1匁3分	49銭	68銭
4	ガーゼ ダマス	紋紗	絹撚糸	絹撚糸	チューリヒ	1m10cm	2尺9寸	10.3g/1m	2匁4分	1円72銭	2円45銭
5	モスリン ブロデ	刺繍モスリン（薄地物）	絹撚糸	絹撚糸	リヨン	1m12cm	2尺9寸6分	14g/1m	3匁2分	1円26銭	1円76銭
6	モスリン ブロデ	刺繍モスリン（薄地物）	絹撚糸	絹撚糸	リヨン	1m14cm	3尺1分	15g/1m	3匁3分	1円61銭	2円36銭
7	マルスリーヌ	マルスリーヌ（薄地物）	絹撚糸	絹撚糸	チューリヒ	47cm	1尺2寸4分	9g/1m	4匁8分	1円36銭	2円10銭
8	エトフェ ブア オブレル	傘地絹	絹撚糸	絹撚糸	リヨン	1m14cm	3尺1分	25g/1m	5匁5分	1円52銭	2円24銭
9	エトフェ ブア オブレル	傘地絹	絹撚糸	絹撚糸	リヨン	1m11cm	2尺9寸3分	29g/1m	6匁6分	1円50銭	2円19銭
10	クレープ ド シーヌ	縮緬（薄地物）	生糸	絹撚糸	リヨン	63cm	1尺6寸6分	17g/1m	6匁8分	1円	1円47銭
11	サテン	繻子	絹撚糸	絹撚糸	コモ	96cm	2尺5寸3分	29g/1m	7匁6分	1円	1円40銭
12	ガーゼ ペキン	縞紗	絹撚糸	絹撚糸	チューリヒ	53cm	1尺4寸	17g/1m	8匁1分	79銭	1円28銭
13	**ポンジー ジャポネーゼ**	**日本羽二重**	**生糸**	**生糸**	**リヨン**	**58cm**	**1尺5寸3分**	**19g/1m**	**8匁3分**	**46銭**	**1円30銭**
14	クレーポン ファソネ	珍柄縮緬	絹撚糸	絹撚糸	チューリヒ	52cm	1尺3寸7分	17g/1m	8匁3分	1円27銭	1円92銭
15	ツイルド ポンジー	綾羽二重	絹撚糸	紡績絹糸	パターソン	24.5インチ	1尺6寸4分	0.73オンス/1ヤード	8匁4分	52銭	73銭
16	ポンジー シノワ	支那羽二重	生糸/紬糸	生糸/紬糸	リヨン	54cm	1尺4寸3分	20g/1m	9匁3分	77銭	1円24銭
17	サテン グラス	玉虫繻子	絹撚糸	綿糸	クレフェルト	1m22cm	3尺3寸2分	47g/1m	9匁4分	51銭	65銭
18	クレープ	縮緬（薄地物）	生糸	絹撚糸	パターソン	22.5インチ	1尺5寸	0.77オンス/1ヤード	9匁7分	1円39銭	2円
19	ポンジー シャンハイ	上海羽二重	生糸/紬糸	生糸/紬糸	チューリヒ	58cm	1尺5寸3分	23g/1m	10匁	96銭	1円50銭
20	ウオッシュ シルク	耐洗絹布	紡績絹糸	生糸	ブラッドフォード	24インチ	1尺6寸	0.87オンス/1ヤード	10匁3分	59銭	73銭
21	ファンシイ タフタ	新柄タフタ	絹撚糸	絹撚糸	パターソン	19.25インチ	1尺2寸8分	0.73オンス/1ヤード	10匁8分	84銭	1円17銭
22	リノン	（絹麻交織）	絹撚糸/亜麻糸	絹撚糸/亜麻糸	ミラノ	81cm	2尺1寸4分	35g/1m	10匁9分	71銭	1円49銭
23	タフタ ユニ	平タフタ	絹撚糸	絹撚糸	クレフェルト	45cm	1尺1寸9分	20g/1m	11匁2分	67銭	1円29銭
24	エトフェ ブア オブレル	傘地絹	絹撚糸	絹撚糸	コモ	56cm	1尺4寸8分	27g/1m	12匁2分	1円16銭	1円74銭
25	タフタ ペキン	縞タフタ	絹撚糸	絹撚糸	リヨン	50cm	1尺3寸2分	25g/1m	12匁6分	1円32銭	1円83銭
26	タフタ エコセーズ	格子タフタ	絹撚糸	絹撚糸	ウースター	46cm	1尺2寸1分	23g/1m	12匁7分	1円16銭	1円44銭
27	サテン リベルテー	リバティ サテン（繻子）	紡績絹糸	紡績絹糸	クレフェルト	52cm	1尺3寸7分	27g/1m	13匁1分	1円12銭	1円40銭
28	タフタ レジェ	縞タフタ	絹撚糸	絹撚糸	チューリヒ	52cm	1尺3寸7分	27g/1m	13匁1分	1円41銭	1円92銭
29	タフタ シーヌ	絣タフタ	絹撚糸	絹撚糸	チューリヒ	51cm	1尺3寸5分	27g/1m	13匁3分	1円94銭	2円95銭
30	ファンシイ タフタ	綟子入タフタ	絹撚糸	絹撚糸	パターソン	19.75インチ	1尺3寸2分	0.95オンス/1ヤード	13匁6分	1円34銭	2円4銭
31	ファンシイ タフタ	新柄タフタ	絹撚糸	絹撚糸	パターソン	20.25インチ	1尺3寸5分	1.00オンス/1ヤード	14匁	1円2銭	1円47銭
32	タフタ ア ジョワ	綟子入タフタ	絹撚糸	絹撚糸	チューリヒ	49cm	1尺2寸9分	27g/1m	14匁	1円80銭	2円42銭
33	タフタ ファソネ	新柄タフタ	絹撚糸	絹撚糸	チューリヒ	52cm	1尺3寸7分	29g/1m	14匁1分	1円85銭	2円90銭
34	エオリーヌ レジェ	縞エオリンヌ	絹撚糸	綿糸	コモ	1m19cm	3尺1寸4分	68g/1m	14匁4分	1円46銭	2円34銭
備考①	ポンジー リオネーゼ	里昂羽二重	紡績絹糸	紡績絹糸	リヨン	51cm	1尺3寸5分	33g/1m	16匁3分	97銭	1円25銭
備考②	クレポー エプリム	捺染縮布	絹撚糸	綿糸	チューリヒ	50cm	1尺3寸2分	33g/1m	16匁7分	93銭	1円58銭

注）　【卸売値段】・【小売値段】は、ともに23インチ換算値。
史料）山口　務・登坂秀興共編『欧米染織鑑』東京実用社、1901年、筆者所蔵。

ゼ」(23インチ幅)の目付は8匁3分となり、卸売値段が46銭で小売値段は1円30銭であった。生地はおそらく福井産の羽二重であり、当該製品は女性用のブラウス地であったろう。配色・デザインは、紫紺地に直径1.3ミリほどの小さな白い水玉模様が上下5ミリずつずれながら1センチ間隔で捺染された、シンプルで細かな柄である。このポンジー　ジャポネーゼは、サンプルのなかで小売段階の利幅がもっとも大きかったことが特筆できる。

注目したいのは、目付8匁以上の衣類用の重目生地として、ポンジー　ジャポネーゼと価格的に拮抗する以下の9品目である。すなわち、下級絹布の定義を卸売相場50銭前後～1円未満／小売相場65銭～1円50銭とすると、この価格領域に①ドイツ・クレフェルト製の「サテン　グラス(玉虫繻子)」(卸売値51銭―小売値65銭)、②アメリカ・パターソン製の「ツイルド　ポンジー(綾羽二重)」(同52銭―73銭)、③イギリス・ブラッドフォード製の「ウォッシュ　シルク(耐洗絹綿繻子)」(同59銭― 73銭)、④クレフェルト製の「タフタ　ユニ(薄琥珀無地)」(同67銭―1円17銭)、⑤ミラノ製の「リノン(絹毛交織)」(同71銭―1円49銭)、⑥リヨン製の「ポンジー　シノワ(支那羽二重)」(同77銭―1円24銭)、⑦スイス・チューリヒ製の「ガーゼ　ペキン(縞紗)」(同79銭―1円26銭)、⑧パターソン製の「ファンシイ　タフタ(薄琥珀新柄)」(同84銭―1円17銭)、そして⑨チューリヒ製の「ポンジー　シャンハイ(上海羽二重)」(同96銭―1円50銭)が分布する。

なかでも、卸売相場においてポンジー　ジャポネーゼと拮抗する50銭前後の値を示す品目は、サテン　グラス(クレフェルト)・ツイルド　ポンジー(パターソン)・ウォッシュ　シルク(ブラッドフォード)の3品目[57]であるのにたいし、小売相場で拮抗するのが、ポンジー　シノワ(リヨン捺染品)・ガーゼ　ペキン(チューリヒ)・タフタ　ユニ(クレフェルト)・ファンシイ　タフタ(パターソン)・ポンジー　シャンハイ(チューリヒ捺染品)の5品目である。換言すれば、ポンジー　ジャポネーゼとは対照的に小売段階の利幅が小さかったのが、サテン　グラス(クレフェルト)・ツイルド　ポンジー(パターソン)・ウォッシュ　シルク(ブラッドフォード)の3品目であるのにたいし、同利幅が比較的大きいのが、ポンジー　シノワ(リヨン捺染品)・ガーゼ　ペキン(チューリヒ)・タフタ　ユニ(クレフェルト)・ポンジー　シャンハイ(チューリヒ捺染品)の4品目であったとみることができよう。

小売段階の利幅が小さい3品目はいずれも力織機製品であり、先染製品のサテン　グラスが繻子の下等品、後染製品のツイルド　ポンジーとウォッシュ　シルクが紡績絹糸を交織した反染品で、いずれも代表的な下級絹布としてみなすことができる。したがって、ポンジー　ジャポネーゼもそのマテリアル(半製品＝中間製品)としての日本羽二重の品質が劣化すれば、こうした品目の下級絹布との直接的な価格競争を強いられたにちがいない。

いっぽう、利幅の大きい4品目のうち、ポンジー　シノワとポンジー　シャンハイの中国産ポンジーの捺染品は、日本羽二重の加工品であるポンジー　ジャポネーゼよりも卸売相場が高いが、前2者の配色・デザインがワンパターンでシンプルな後者よりも曲線をもちいた多彩な模様であることによるものと考えられる。中国産ポンジーが日本羽二重よりも品質劣位にあったという想定に立つかぎりにおいて、デザインに起因する染色・整理工程での相対的なコスト高を反映したものとみることができる。したがって、このケースにあっても日本羽二重の品質が劣化すれば、これら中国産ポンジーや補充サンプルとして表示したリヨン製の下級絹布「ポンジー　リオネーゼ」(卸売値97銭―小売値1円25銭)との直接的な価格競争にさらされたであろう。なお、『欧米染織鑑』に収録されたポンジー　リオネーゼの当該サンプルは、経・緯糸ともに紡績絹糸遣いの製品である。

かくして、ここまでの考察からポンジー　ジャポネーゼの競合品として浮かび上がってくるのが、ガーゼ　ペキン（チューリヒ）とタフタ　ユニ（クレフェルト）の２品目である。これらの製品は生糸遣い（経・緯糸とも絹撚糸）のいわゆる純絹製品であるが、両者とも力織機で量産された反染品であるので、いずれも中級絹布（縞紗・タフタ無地）の下等品であった。要するに、おもに衣類用となる目付10匁前後の重目領域において、日本羽二重を捺染加工したポンジー　ジャポネーゼは、ガーゼ　ペキンやタフタ　ユニなどの中級絹布の下等品と競合していたと結論づけることができる。

なお、整理番号21のアメリカ・パターソン製のタフタ　ファソネ「ファンシイ　タフタ」（卸売値84銭―小売値１円17銭）と補充サンプルのチューリヒ製の「クレポー　エプリム（捺染縮布）」の２点について、ひとこと言及しておく。パターソン製のファンシイ　タフタは小売段階で中間的な利幅（33銭）を示し、先染めの模様柄であるが力織機製品のため、無地物のクレフェルト製のタフタ　ユニと同等水準の小売値となっている。いっぽう、チューリヒ製のクレポー　エプリムは、強撚糸を使わずゴーフラージュのようなロール圧縮技術によって、微細な捺染模様の染付と同時に細かな縦皺をつくりだした擬似縮緬（クレープ）である。

『欧米染織鑑』の収録サンプルをみると、ヨーロッパ製品よりもアメリカ製品のほうにデザインが比較的シンプルなものが目立つとはいえ、小売相場が１ヤード50セント内外という日用品レベルに達するほど安価なファンシイ　タフタまでもが市場に出まわっていたことがうかがえる。それは、模様柄のファンシイ　タフタが無地物のプレイン　タフタとツイルド　ポンジーなどのフーラーとが競合する低価格帯にまで下降参入していたことを意味する。それゆえアメリカ市場においては、日本羽二重の捺染品および縞柄の高配（こうばい）甲斐絹が、タフタ無地物や同模様物の下等品クラスとの直接的な競合関係にあったとみることができよう。

5　おわりに

輸出羽二重に関する不可欠な研究課題は、海外需要の動向すなわちそれをめぐる国際的な市場条件や市況を分析し、欧米市場における日本羽二重の地位や競合関係をより具体的に考察することにある。本稿であきらかとなったのは、以下の諸点である。

日本に先んじて絹の大衆化が進展した欧米市場において、とりわけ19世紀末～20世紀初頭にかけて絹織物の低価格化が薄地軽量化をともなって顕著に進行した。低価格化による大衆需要の喚起は、おもに女性ファッションの軽量化と装飾化に拍車をかけ、とりわけアメリカ市場では下級絹布のみならず中級品の一部が日用品の領域にまで浸透するほどの勢いであった。絹織物が全体的に低価格化するなかで、軽量安価な薄絹製品がにわかに需要を獲得し当該期のモードを下支えしていたのである。

この動向が、極東の日本において在来品よりも軽量かつ低廉な羽二重や甲斐絹の新製品を改良する刺激＝トリガーとなった。日本で輸出羽二重を急成長させた要因は、軽量羽二重の開発にあった。20世紀になると、薄地軽量化による目付低下が加速化し、輸出羽二重の生産重心は中目物（6.5～５匁付）および軽目物（4.5～３匁付）に移行した。欧米諸国におけるイブニングドレス用の需要増加にくわえ、女性下着用のみならず上衣用の羽二重需要がそれまでの重目物から中目・軽目物へと急速にシフトしたためであった。これに、衣類および帽子装飾・リボン用の軽目絹の需要が拍車をかけたのである。

そして、かつてなかったほどの薄絹需要が急増した欧米市場は、より軽量低廉な羽二重の生産を日本に要求することになった。それまで重目の生産比率が大きかった福井羽二重が7.5～６匁付の中目領域に参入し、中目の石川羽二重も5.5～５匁付へ、そして軽目の川俣羽二重が

4.5～3匁付へと、急速に薄地軽量化をすすめたのはこのためである。高機＝手織段階にあった日本の羽二重業界が、輸出拡大とともにいわゆる「粗製濫造」問題をかかえこんでいくのは、まさに欧米市場で惹起した薄地軽量品への流行シフトに積極的に対応したからにほかならなかった。いうまでもなく、その対応は新たな競合にさらされながら、粗製品の生産に誘惑される危険性をつねに内在させるものとなったからである。

基本的に、生糸遣いの純絹製品の日本羽二重が品質を劣化させると、ヨーロッパ市場においては中国産ポンジーおよびヨーロッパ各国製の下級絹布群（紡績絹糸や綿糸などの交織品）に挟撃され、アメリカ市場にあってはパターソン製の下級絹布（ツイルド　ポンジーなどのフーラー）との競合が激化した。いっぽう、その品質が維持される場合でも、日本羽二重は、タフタやサテンなどの中級絹布の下等品との競合に直面したのである。しかも、実際の競合はそれだけにとどまらなかった。市場で日本羽二重の評価が高まると、リヨン染織業界は、日本羽二重に対抗して中国生糸をはじめ紡績絹糸や綿糸などのより安価な原料糸を使用する低価格品や交織製品にくわえ、最新の仕上技術を駆使して応戦した。すなわち、ゴーフラージュ技術によって、品質劣位で価格低廉なリヨン製ポンジーに模様織物のような浮出模様と光沢を顕出させた新製品を投入したのである。

すでにスイスやドイツなどのヨーロッパの主要絹業国でも、力織機の普及がアメリカほど急速ではなかったとはいえ[58]、未精錬の生糸および紡績絹糸や綿糸を力織機にかけて量産したのち、織りあがった白生地を一括して精錬・染色・整理する反染品が市場に抬頭していた。くわえて欧米市場において日本羽二重は、こうした準備・製織工程での革新により生産費を大幅に削減した反染品のみならず、最新の仕上技術＝後工程の革新により下級絹布の外観を一変させた新製品との競合にも遭遇したとみることができよう。

こうした状況下、日本でもっとも軽量安価な一本経の軽目羽二重を開発し急成長した福島県川俣産地が直面する事態が、19世紀末にリヨンで開発された絹モスリンとの競合であった。絹モスリンは、川俣羽二重とおなじく1本経の単純平織組織であったが、経・緯糸ともに最高品質の9～11デニールという極細生糸を用い、しかも緯糸にはその強撚糸を1本のまま力織機にかけて量産する、まさに蝉の薄羽のような超軽量絹であった。新製品の絹モスリンは、おもにスイス製のタフタやドイツ製の絹綿繻子・ビロードとの「猛烈ナル競争」[59]により中・下級品市場を奪われていたフランス＝リヨンが起死回生をねらって開発に成功した極薄絹布であった。

当初から力織機による量産体制がしかれ、リヨンの力織機化率を大幅に押し上げた絹モスリンは、それまで低迷気味であったリヨン染織業界に活況をもたらしている。しかも、それだけにとどまらない。1870年代以降、一貫して低落傾向にあった生糸価格をも押し上げたのである[60]。目付換算値が1～3匁という、まさに驚異的な製品である絹モスリンは、リヨンの独壇場であった。しかしひるがえると、19世紀末から20世紀初頭にかけて大流行し一世を風靡する、この最新で最強の流行品の低級代用品として需要を獲得したのが川俣羽二重であった。しかも日本羽二重のなかで、ゴーフラージュ製品の好適素材として外国製品に対抗できたのも軽量安価な川俣羽二重であった[61]。

それだけに、川俣産地の対応に追随し、北陸地方や山形鶴岡などの羽二重生産が軽目指向を強めるプロセスは、日本羽二重が中国産ポンジーや欧米製の下級絹布にたいして発揮しえた純絹製品としての品質優位を喪失し、欧米市場においてリヨン製絹モスリンの下等品やゴーフラージュ用の下級絹布との価格競争にさらされたことを意味する。機械化すなわち力織機の導入と精錬事業の拠点高度化をふくむ統制的な品質

管理の日程が、日本の輸出羽二重業界でにわかに浮上することになった所以である。

注および参考文献

(1)(2)松原建彦『フランス近代絹工業史論』晃洋書房，2003年.

(3)拙稿「19世紀末～20世紀初頭・国際市場における絹織物の低価格品と流行品―『欧米染織鑑』に収録された織物サンプルの分析―」『埼玉大学教育学部紀要（人文・社会科学）』第56巻第1号，2007年3月，pp.291～305.

(4)(5)明治22年6月□日付在里昂帝国領事館報告「仏国里昂ニ於ケル日本羽二重ノ景況」『通商報告』第124号，1889年9月30日（『通商彙纂（復刻版）』第12巻，1988年，不二出版，291頁）.

(6)明治初年代に京都府給費生としてフランス・リヨンの織物学校に留学し，帰国後，京都織殿の技術者を経て，足利染織講習所長・栃木県立工業学校長などを歴任した.

(7)～(9)磯部安次郎・近藤徳太郎「伊仏絹業視察報告」『農商務省商工局臨時報告　明治三十四年』1901年（松村敏監修『農商務省商工局臨時報告（復刻版）』第5巻，ゆまに書房，2002年，146頁・96頁）.

(10)松井文太郎「欧米織物業視察報告書」1901年（『農商務省商工局臨時報告（復刻版）』第6巻，70頁）.

(11)杉田定一「海外絹織物調査報告」『農商務省商工局臨時報告』1901年（『農商務省商工局臨時報告（復刻版）』第5巻，2頁）.

(12)(13)杉田定一「欧米羽二重商況視察報告」農商務省商工局，1897年2月，国立国会図書館所蔵，3頁.

(14)磯部安次郎・近藤徳太郎「伊仏絹業視察報告」（『農商務省商工局臨時報告（復刻版）』第5巻，102頁）.

(15)小木田敏彦「羽二重産業の力織機化に関する一考察」『経済地理学年報』第46巻第2号，2002年6月，pp.22～38．山内　太「明治後期輸出絹織物業における品質管理問題」『市場史研究』第22号，2002年11月，pp.47～61．橋野知子『産業発展と産地・市場・制度―明治期絹織物業の進化とダイナミズム―』ミネルヴァ書房，2007年．橋野知子「明治期における輸出産業の成長と地域―越前羽二重生産・流通における『社』の機能―」『経済研究（大東文化大学）』2007年3月，pp.13～21.

(16)拙稿「19世紀末～20世紀初頭・国際市場における絹織物の低価格品と流行品」『埼玉大学教育学部紀要』第56巻第1号．なお，『欧米染織鑑』の編集経緯および収録サンプルの詳細については，同論文を参照されたい.

(17)日本織物新聞社編纂部編『増補　染織辞典』同社，1934年．西村益者『第2巻　実用織物の研究（第4号　羽二重）』東京織物研究会，1930年，95頁.

(18)橋野知子『産業発展と産地・市場・制度』ミネルヴァ書房.

(19)山内　太「明治後期輸出絹織物業における品質管理問題」『市場史研究』第22号.

(20)(21)今西平兵衛・高松長四郎「伊国『コモ』市絹業博覧会視察報告」『農商務省商工局臨時報告』1900年（『農商務省商工局臨時報告（復刻版）』第5巻，8頁・324頁）.

(22)～(24)磯部安次郎・近藤徳太郎「伊仏絹業視察報告」（『農商務省商工局臨時報告（復刻版）』第5巻，137頁・357頁）.

(25)拙稿「19世紀末～20世紀初頭・国際市場における絹織物の低価格品と流行品」『埼玉大学教育学部紀要』第56巻第1号.

(26)明治33年3月26日付在里昂帝国領事館報告「仏国ニ於ケル本邦羽二重」『通商彙纂』第170号（『通商彙纂（復刻版）』第54巻，85頁）.

(27)磯部安次郎・近藤徳太郎「伊仏絹業視察報告」（『農商務省商工局臨時報告（復刻版）』第5巻，116頁）.

(28)明治28年10月8日付在紐育帝国領事館報告「米国向羽二重其他絹物ニ関スル注意」『通商報告』第29号，1895年（『通商彙纂（復刻版）』第26巻，393頁）.

(29)秦　敏之「米国ニ於ケル絹織物商況報告」『農商務省商工局臨時報告』1901年（『農商務省商工局臨時報告（復刻版）』第7巻，197～215頁）.

(30)(31)明治33年3月26日付在里昂帝国領事館報

告「仏国ニ於ケル本邦産羽二重」『通商彙纂』第170号（『通商彙纂（復刻版）』第54巻，85頁）．

(32)農商務省商工局『輸出絹織物調査資料』生産調査会，1911年，15～26頁．

(33)～(38)村野文次郎「欧米絹織物状況視察報告書」『農商務省商工局臨時報告』1897年（『農商務省商工局臨時報告（復刻版）』第1巻，7～8頁）．

(39)(40)杉田定一「欧米羽二重商況視察報告」国立国会図書館所蔵，1897年，15頁・3頁．

(41)村野文次郎「欧米絹織物状況視察報告書」1897年（『農商務省商工局臨時報告（復刻版）』第1巻，10頁）．

(42)明治28年10月8日付在紐育領事館報告「米国向羽二重其他絹物ニ関スル注意」『通商報告』第29号，1895年（『通商彙纂（復刻版）』第26巻，393頁）．

(43)(44)明治28年9月10日付在桑港領事館報告「米国向羽二重其他絹物ニ関スル注意」『通商報告』第29号，1895年（『通商彙纂（復刻版）』第26巻，399頁）．

(45)杉田定一「海外絹織物調査報告」1901年（『農商務省商工局臨時報告（復刻版）』第5巻，199頁）．

(46)今西平兵衛・高松長四郎「伊国『コモ』市絹業博覧会視察報告」1900年（『農商務省商工局臨時報告（復刻版）』第5巻，324頁）．

(47)～(50)明治33年3月26日付在里昂帝国領事館報告「仏国ニ於ケル本邦産羽二重」『通商彙纂』第170号（『通商彙纂（復刻版）』第54巻，86頁）．

(51)松井文太郎「欧米織物業視察報告書」1901年（『農商務省商工局臨時報告（復刻版）』第6巻，72頁）．

(52)ヨーロッパ市場における日本羽二重の競合関係の背後には，もう一つ別の競合関係が介在していた．それは絹織物をめぐる原料糸の市場競合であり，なかでも日本生糸と中国生糸との競合であった．この問題については，つぎの機会に考察する予定である．

(53)生地を鋼鉄ロール機に通しながら布帛面に浮出模様と光沢を顕出せしめる仕上技術で，品位劣位な織物の外観を一変させた．ゴーフラージュは日本では凸張技術と訳されたが，英語表現では「エンボッシング embossing」という．

(54)明治33年3月26日付在里昂帝国領事館報告「仏国ニ於ケル本邦産羽二重」『通商彙纂』第170号（『通商彙纂（復刻版）』第54巻，86～87頁）．

(55)明治22年6月□日付在里昂帝国領事館報告「仏国里昂ニ於ケル日本羽二重ノ景況」『通商報告』第124号（『通商彙纂（復刻版）』第12巻，291頁）．

(56)松井文太郎「欧米織物業視察報告書」1901年（『農商務省商工局臨時報告（復刻版）』第6巻，104頁）．

(57)これらのうち，後2者は生糸と紡績絹糸の交織製品および紡績絹糸織であり，ツイルドポンジーはアメリカで「フーラー」と呼称され，ウォッシュ　シルクはイギリスやドイツなどで「リバティー　サテン」ともよばれた．

(58)松原建彦『フランス近代絹工業史論』．中林真幸『近代資本主義の組織―製糸業の発展における取引の統治と生産の構造―』東京大学出版会，2003年．

(59)農商務省商工局『輸出絹織物調査資料』生産調査会，147頁．

(60)明治29年1月10日付在里昂帝国領事館報告「里昂蚕糸商況並既往十五ケ年相場比較」（『通商彙纂』第35号（『通商彙纂（復刻版）』第28巻，229～230頁），明治39年1月18日付在里昂帝国領事館報告「仏国千九百四年度ニ於ケル絹糸状況」（同上第99巻，11～12頁）．中林真幸『近代資本主義の組織』，65頁．

(61)明治33年3月26日付在里昂帝国領事館報告「仏国ニ於ケル本邦産羽二重」（『通商彙纂（復刻版）』第54巻，87頁）．

（2008年9月30日提出）
（2008年10月17日受理）